

## 新約聖書 ヨハネによる福音書 2章 1節—11節 (新共同訳)

<sup>1</sup>三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。<sup>2</sup>イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。<sup>3</sup>ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。<sup>4</sup>イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」<sup>5</sup>しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。<sup>6</sup>そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。<sup>7</sup>イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。<sup>8</sup>イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。<sup>9</sup>世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったもので、花婿を呼んで、<sup>10</sup>言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」<sup>11</sup>イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「カナの婚礼」

本日の福音書は、イエスが、ガリラヤのカナで行われた婚礼の席に招かれて出席し、そこで水をぶどう酒に変えた奇跡を記したものです。

奇跡は、聖書においては、単に不可思議なことを表しているだけではありません。それは、「しるし」です。「しるし」は、栄光、すなわち神の力の顕現、表れです。奇跡は、滅びる人間を救いに、絶望を希望に、悲しみを喜びに変える力です。

イエスは、福音を人々に伝えるその宣教活動のまずはじめに、婚礼という喜ばしい宴の席に出席して、一座を祝い祝福します。そのような祝いの席に必要なものはぶどう酒でした、詩編 104 編 15 節に「ぶどう酒は人の心を喜ばせ」とある通りです。

婚礼の席にぶどう酒がなくなったことは、人々にとって困ったことであり、緊急事態です。そこでイエスの母マリアはイエスに「ぶどう酒がなくなりました」と伝えます(ヨハネ 2:3)。

ここでマリアは、イエスの母という立場によって、イエスの気持ちを動かそうとしていたのかもしれませんが、他ならぬ母である私が頼めば、何とかしてくれるであろう、という期待がそこにあったかもしれません。

しかしイエスは「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と、一見、冷たく思える返答をします（ヨハネ 2:4）。

普通なら「お母さん」と呼ぶところを、「婦人よ」と呼び、わざと「距離」を置いているような語り方をしたのです。なぜイエスは、母マリアを突き放したのでしょうか。

イエスはここで、親子の人情に従うよりは神の意志に従おうとするのです。人の意志が、いつも神の意志と一致するとは限りません。それが一致するためには「時」が必要です。

特に、血のつながりにより頼むことは、正しい判断を狂わせてしまう側面があります。神の意志と人の意志との一致を見極めるためには、「時」を待つことが必要です。だからイエスは、「わたしの時はまだ来ていません」と言ったのです（ヨハネ 2:4）。

「わたしの時」とは何でしょうか。それは人間にとって都合の良い時ではなく、また必要であると考えられる時でもなく、神の意志が実現されるべき時です。人間の意志と神の意志がいつも必ず一致するとは限りません。そこには、時を待つことが求められるのです。神の意志の実現する時が来ると信じて待たねばならないのです。

ここでイエスは、肉親としての関係を超えて、メシアとして自分が行動しなければならないことを言い表しました。イエスの行動は、肉親である母親から頼まれたがゆえに、特別になされるものではありません。

マリアは、イエスからいったんは拒絶され、それを受け入れます。と同時に、召使いたちに「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言っておきます（ヨハネ 2:4）。マリアは、イエスがどうするかを待ち、困っている召使いにも、イエスが語りはじめることを待つようにと命じるのです。

いつ救いが来るか、それは神のみぞ知ることであり、人間の左右しうるところではありません。そしてしばしば神は、人間を救う前に、打ち砕き、絶望におとし入れることがあるでしょう。

本日の福音書は、私たちの祈りの生活において大切なことを示唆しています。母マリアは、ぶどう酒がないという困った状況を率直にイエスに告げました。そしてそのことによって、イエスから初めは一見冷たい態度を取られたものの、マリアがとにかくイエスにそれを告げたことは、大事なことです。

私たちの祈りに、いつも神がすぐにこたえてくれるわけではありません。この時の母マリアの願いもすぐにこたえられたわけではありませんでした。しかしマリアの願いは、しっかりとイエス・キリストに届いたのです。

神は、しばしば時を延ばされます。それはどうしてかと言えば、すべての人間

的な可能性が終わり、ここから先はもう神の可能性でしかないということがわかるため、つまり私たちが神に栄光を帰するためではないでしょうか。

当時の習慣として「初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んで酔いが回った頃になると、悪いものを出す」のが通例のようでした。ですがイエスの差し出す「良いぶどう酒」は反対でした。

「喜び」は時と共に薄れていくのが、この世では自然なことです。はじめは夢中になっていたものでも、だんだんと飽きていく経験は、誰もがしていることでしょう。しかし神の国では、ぶどう酒に象徴される「喜び」は、質においてますます良いものとなっていき、限りなくあふれていくのです。

早いもので、2025年に入ってから約2週間が経ちました。

私たち人間は、様々な種類の不安や恐れを持っていると思います。

その中の一つに、「相手からだんだんと喜びがなくなっていく恐れ」というものがあるのではないのでしょうか。

分かりやすい例えで言うならば、初めは自分に好意や関心を持っていた相手が、自分にだんだんと飽きていくといったことです。

しかし、神の国は、喜びは時と共に薄れていくという世の常識とは、逆のところにあります。

神の国は、時が経てば経つほど、喜びが増し、その喜びはますます良いものとなっていきます。

私たち人間は、日々の生活の中で、様々な心配や不安、恐れを抱えてしまいがちです。

そんな時は、それらに心煩わせることなく、全てを神様に委ねる気持ちで過ごして行きましょう。

私たちは日々、希望と喜びを持ち、神様の助けに感謝しつつ、共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

全能の神様。あなたは、善き計画をお持ちであり、私たちの思いを超えてそれをなしとげてくださいます。私たちが祈り、あなたの時を待つことができるようにしてください。また、本日の福音書の花婿と花嫁のように、私たちの知らないところで、私たちのために祈り、事をなして下さるかたがおられることに感謝しつつ、日々を歩ませてください。救い主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 イザヤ書 62章 1節—5節（新共同訳）

<sup>1</sup> シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず／エルサレムのために、わたしは決して黙さない。彼女の正しさが光と輝き出で／彼女の救いが松明のように燃え上がるまで。<sup>2</sup> 諸国の民はあなたの正しさを見／王はすべて、あなたの栄光を仰ぐ。主の口が定めた新しい名をもって／あなたは呼ばれるであろう。<sup>3</sup> あなたは主の御手の中で輝かしい冠となり／あなたの神の御手の中で王冠となる。<sup>4</sup> あなたは再び「捨てられた女」と呼ばれることなく／あなたの土地は再び「荒廃」と呼ばれることはない。あなたは「望まれるもの」と呼ばれ／あなたの土地は「夫を持つもの」と呼ばれる。主があなたを望まれ／あなたの土地は夫を得るからである。<sup>5</sup> 若者がおとめをめとるように／あなたを再建される方があなたをめとり／花婿が花嫁を喜びとするように／あなたの神はあなたを喜びとされる。

新約聖書 コリントの信徒への手紙 一 12章 1節—11節（新共同訳）

<sup>1</sup> 兄弟たち、霊的な賜物については、次のことはぜひ知っておいてほしい。<sup>2</sup> あなたがたがまだ異教徒だったころ、誘われるままに、ものの言えない偶像のもとに連れて行かれたことを覚えているでしょう。<sup>3</sup> ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。

<sup>4</sup> 賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。<sup>5</sup> 務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。<sup>6</sup> 働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。<sup>7</sup> 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。<sup>8</sup> ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、<sup>9</sup> ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、<sup>10</sup> ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。<sup>11</sup> これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。

教会讃美歌 131番「聖なる聖なる」1,2,4節、337番「やすかれわがこころよ」1,2,3節、357番「主なる神を」1,2,3節、199番「主よいま去りゆく」1,2,3節